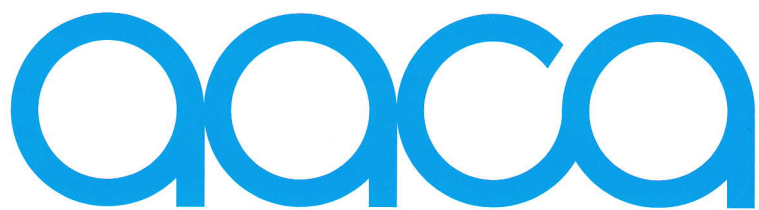


2019.7 no.84



一般社団法人 日本建築美術工芸協会



第1回 街に飛び出す作品展

1	2	3	4	5	6
	7	8		9	10
11	12	13		14	

1. 鍵井保秀  
「SWEET HEARTS」  
ポリエステル  
インクジェット  
w540×h210
2. 山崎輝子  
「幡（ばん）」  
牛革・牛床・金箔・漆  
w700×h900×d40
3. 鍵井保秀  
「GOLDFISH」  
インクジェット  
ポリエステル  
w400×h2200×d400
4. 中野恵美子  
「To Where?  
—Machupicchu」  
綿 染織  
w850×h1600
5. 平山健雄  
「無題」  
ガラス  
w400×h700
6. 帆足枝里子  
「景No.2」  
陶土・木  
w1700×h1800
7. 山崎輝子  
「雨水（うすい）」  
牛革・金箔・顔料  
w730×h145
8. 安河内敦子  
「シェルNo.3」  
ガラス  
w450×h200×d450
9. 山崎和子  
「Move on Time」  
染色  
w970×h1620
10. 白野順子  
「地球の輝き」  
染織・キルト  
w1300×h1800
11. 吉野ヨシ子  
「滴の詩」  
金属立体  
w450×h700×d300
12. 鈴木法明  
「ようこそ21世紀へ  
種を播く人」  
チタン、ステンレス  
w1400×h2000×d1300
13. 川原昭  
「優遊」  
FRP  
w1200×h1800×d800
14. 野口真理  
「黄の中に風」  
陶土  
w320~420×h460~  
630×d250~460

“街なかミュゼ活動”は建築・都市空間に美術・工芸などの造形作品を取り入れ、人間性豊かな環境づくりを推し進める試みで、日本建築美術工芸協会が取り組む活動として展開しています。

「第1回 街に飛び出す作品展」は2014年10月25日～11月3日建築会館ギャラリー、イベント広場で開催されました。スタートCAM株式会社とオーナー様のご協力により「街なかミュゼ」会場3か所の提供をいただき、応募作家は各作品の前でオーナー様に作品コンセプトをはじめ素材の特徴や作意などの説明をしていきます。そこでは作品の持つ力と共に、作者のプレゼンテーション力が発揮される場となっています。3プロジェクトに作品37点の応募があり応募作品の中から14作品が「街なかミュゼ」に推薦されました。

レセプションでは、設置会場を提供していただいたオーナー様・スタートCAM株式会社担当者並びに作家・作品の紹介があり、選出された作品の作家には、aaca会長 岡本 賢より推薦状が手渡されました。レセプションには100名を上回る参加が有り、作品を囲んでにぎやかに交歓されました。

推薦選定された作品は、竣工に合わせて1年間の「街なかミュゼ」として、作家とともに展覧会委員会の立会いのもと、設置位置や設置方法の検討をしながら設置しました。

これらの作品は1年後「街なかミュゼ」終了時、6作品がオーナー様のお買い上げとなり、常設設置されました。

(実行委員長 安河内敦子)



CONTENTS

■設立 30 周年記念事業

設立 30 周年記念事業報告 岩井光男 4

■ 2019 年度通常総会

2019 年度通常総会 5

2019 年度協会組織図 7



▶▶ 5

■芦原義信生誕 100 年を迎えて

正統なモダニズムの継承者 芦原義信 (4) 飯田郷介 8

■時代の華一輪

あや 紋なす仕事 露口典子 10



▶▶ 12

■会員活動レポート

SAKURA 展・花の美を描く…「島田恭子～桜の世界」 島田恭子 12

令和／人々が美しく心を寄せ合う中で文化が生まれ育つ 上江洲牧子 13

建築×美術×都市 齊木慶一 14

美術展の企画から展示「四方山話」 飯田郷介 15



▶▶ 16

■法人会員の企業活動を訪ねる

TOTO 株式会社を訪ねて 広報委員会 16

■連続講演会 これからの都市景観のあり方を探る @GINZA

GINZA SIX と銀座の街における多様性 / 回遊性 / 持続性 坂本弘之 18

東急プラザ「光の器」－ vessel of light － 畑野 了 19

GINZA PLACE 新しい銀座のアイコン － FRETWORK － 山本 実 20



▶▶ 18

■第 28 回 日本建築美術工芸協会賞を受賞して

越後妻有文化ホール・十日町中央公民館 (光織り) 高橋匡太 21

■第 195 回 aaca フォーラム

AI 時代の手の仕事 －これまでの手仕事とこれからの手仕事－ 大橋正芳 22



▶▶ 22

■事務局だより

24

## 設立 30 周年記念事業

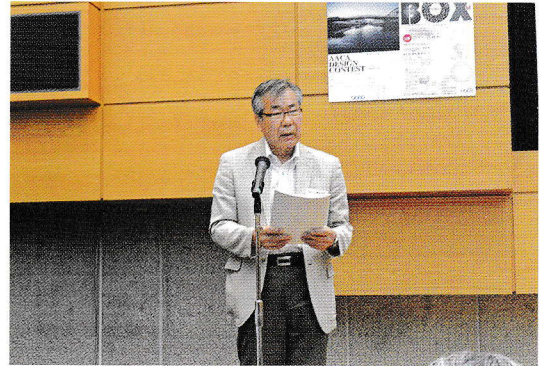
# 一般社団法人建築美術工芸協会設立 30 周年および 芦原義信生誕 100 年記念事業に関する報告とお礼

30 周年記念事業実行委員会委員長 岩井光男

平成 30 年度は aaca（一般社団法人建築美術工芸協会）の設立 30 周年、芦原義信先生の生誕 100 年にあたる記念すべき一年でした。私にとっても若い頃、読んだ「街並みの美学」や「外部空間の設計」が私の携わった丸の内の街づくり計画にたいへん役に立ったこと、芦原太郎さんの特別講演を拝聴して、誰にでも明るく親しみを込めてお話される芦原義信先生の人柄と偉大さを再認識した感慨深い年になりました。昭和 44 年建築家、美術家、メーカーが三位一体となって aai（建築美術工業協会）が日本建築家協会や日本美術家連盟などのバックアップにより設立されました。平成元年には社団法人、そして現在の一般社団法人建築美術工芸協会に引き継がれ、芦原義信先生が提唱された「人間性豊かな文化的都市環境づくりを実現するため建築家、美術家、工芸家、造園家、その他関連の専門家が一堂に会し、お互いに情報を交換し、友情を深め、会員の質的向上をはかる。その目的のために集会、講演会、研究会、展示会、見学会、親睦会などの催しを行い広く一般に公開し、自己研鑽に努める」と言う基本理念と活動は今日まで受け継がれてきました。このたびの 30 周年記念事業は第 27 回 AACA 賞の表彰、生誕 100 年記念芦原義信記念杯、通常総会、美術館見学会、建物視察会（山梨・静岡）、フォーラム、BOX 展、調査研究委員会講演会、役員・委員会・新入会員交流会、景観シンポジウム、街に飛び出す作品展、文化事業委員会講演会、会報発刊、情報文化委員会記念座談会、aaca アーカイブス展、設立 30 周年記念特別設立記念会など計 27 回のイベントが開催されました。また各委員会の代表に参加していただき作成された 30 周年記念誌は宮田亮平文化庁長官・岡本賢会長・松本哲夫会員による鼎談をはじめ、芦原太郎氏、芦原初子氏のインタビュー、理事および委員会委員長に参加していただいた鼎談や座談会、寄稿、委員会活動報告と aaca30 年間の活動記録によって編纂されました。この記念誌は昨年 12 月皆様にお送りさせていただきました。

この一年、建築美術工芸協会会員および各委員会委員の皆様のご協力とご参加によって多くの魅力的な事業を展開することが出来ました。また 30 周年記念事業が滞りなく実施できましたことはすべて会員皆様のご支援のお蔭であります。特に会員の多くの皆様からいただきました協賛金によって 30 周年に相応しい事業を展開することが出来ました。

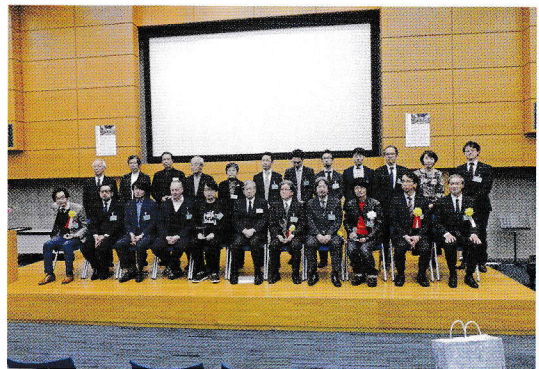
この場をお借りして会員皆様に心からお礼申し上げます。平成から令和へ新たな時代を迎え、aaca 会員皆様の今後益々のご活躍を期待しております。



2019 年度 通常総会記念事業報告



設立 30 周年記念特別設立記念会 2018 年 12 月 12 日



第 27 回 AACA 賞表彰式 2018 年 12 月 12 日



街に飛び出す作品展 2018 年 10 月 25 日

## 2019 年度通常総会

# 2019 年度通常総会

- |         |                       |          |                               |
|---------|-----------------------|----------|-------------------------------|
| ●開催日    | 2019年6月6日(木) 午後5時45分～ | ●会員総数    | 393名(個人会員281名・法人会員112名)       |
| ●場 所    | 建築会館大ホール              | ●総会成立定足数 | 262名                          |
| ●議 長    | 岡本 賢(会長)              | ●出席者数    | 298名(出席者67名、議決権行使書・委任状提出231名) |
| ●議事録署名人 | 白山良一(会員)・田島一宏(会員)     |          |                               |
| ●進 行    | 立石博巳(会員・総務委員会副委員長)    |          |                               |

### 岡本会長 挨拶

皆様、本日は2019年度通常総会にお集まりいただき、ありがとうございます。

ただいまお話がありました、中島昌信さんが5月にお亡くなりになられ、7年にわたり会長として大変ご尽力され、この協会発展のため多くの時間を使っていただきましたことを感謝し、改めて御礼を申し上げご冥福をお祈り申し上げます。

さて協会は昨年、設立30周年事業として数かずのプログラムを展開してまいりまして、会員の皆様がたには大変なご努力とご活躍いただき誠にありがとうございます。

また協賛をいただきました個人・法人の方々には改めて御礼申し上げます。

それぞれの事業については、後ほど実行委員長の岩井副会長から報告致しますが記念事業報告書、並びに芦原太郎氏の特別講演の記録等、本日お配りした資料をお読みいただきたいと存じます。

今年から新しい歩みを始める事になりましたが、元号も令和と変わり新たな気持ちで進めてゆくこととなります。同時にオリンピックイヤーもスタートすることになりますが、オリンピックはスポーツの祭典であります、芸術・文化のかかわりのある祭典でもあると思っていますので、当協会もそれにふさわしい企画を今年度あらたに充実した事業活動を進めて参りたいと思います。

協会の30年間の活動を振り返りますと、協会のシンポジウムや講演会が地方で開催されてきた歴史があります。昨年は宇都宮をテーマにした講演会があり大変興味深い内容になったと思われました。したがって地方をテーマに取り上げた事業も協会の使命であることを示唆されたと感じております。会員の皆様にも同様な視点からそのような事業を取り組んでいただきたいと思っております。

これから新しい年度が始まりますので、会員の皆様に楽

しくにぎやかに30年を超えた新しいステップを始めていただきたいと思っております。

今日は、2018年度の事業報告、決算報告の審議が主な議題となりますので、よろしくお願いいたします。

これをおもちまして私の挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。



## 審議

第一号議案・2018年度事業報告に関する件を東條専務理事、第二号議案・2018年度貸借対照表、正味財産増減計算書、財産目録及び収支計算書に関する件を、石田事務局長より原案説明があり、また森田監事より2018年度の会計及び業務について監査報告がなされ、議長採決の結果 第一号・第二号議案は原案どおり満場一致にて承認された。

第三号議案・長期会費滞納会員の処遇に関する件も原案どおり議長採決により満場一致にて承認された。

第四号議案・2019.20年度理事・監事の選任について議長より提案があり採決により原案どおり満場一致にて承認された。

以上をもって2019年度通常総会の審議は滞りなく終了した。

(事業報告・決算報告は、協会ホームページに掲載)

## 報告

報告、3月27日開催の2018年度第五回理事会にて決議された、2019年度事業計画・事業予算書について石田事務局長より報告された。

(事業計画・事業予算は、協会ホームページに掲載)

## 2019年度 第二回理事会

同日 別室にて2019年度第二回理事会が開催され役員の互選が行われ審議決定し、結果を通常総会会場にて議長より出席者に発表された。

## <2019・20年度 協会役員の紹介>

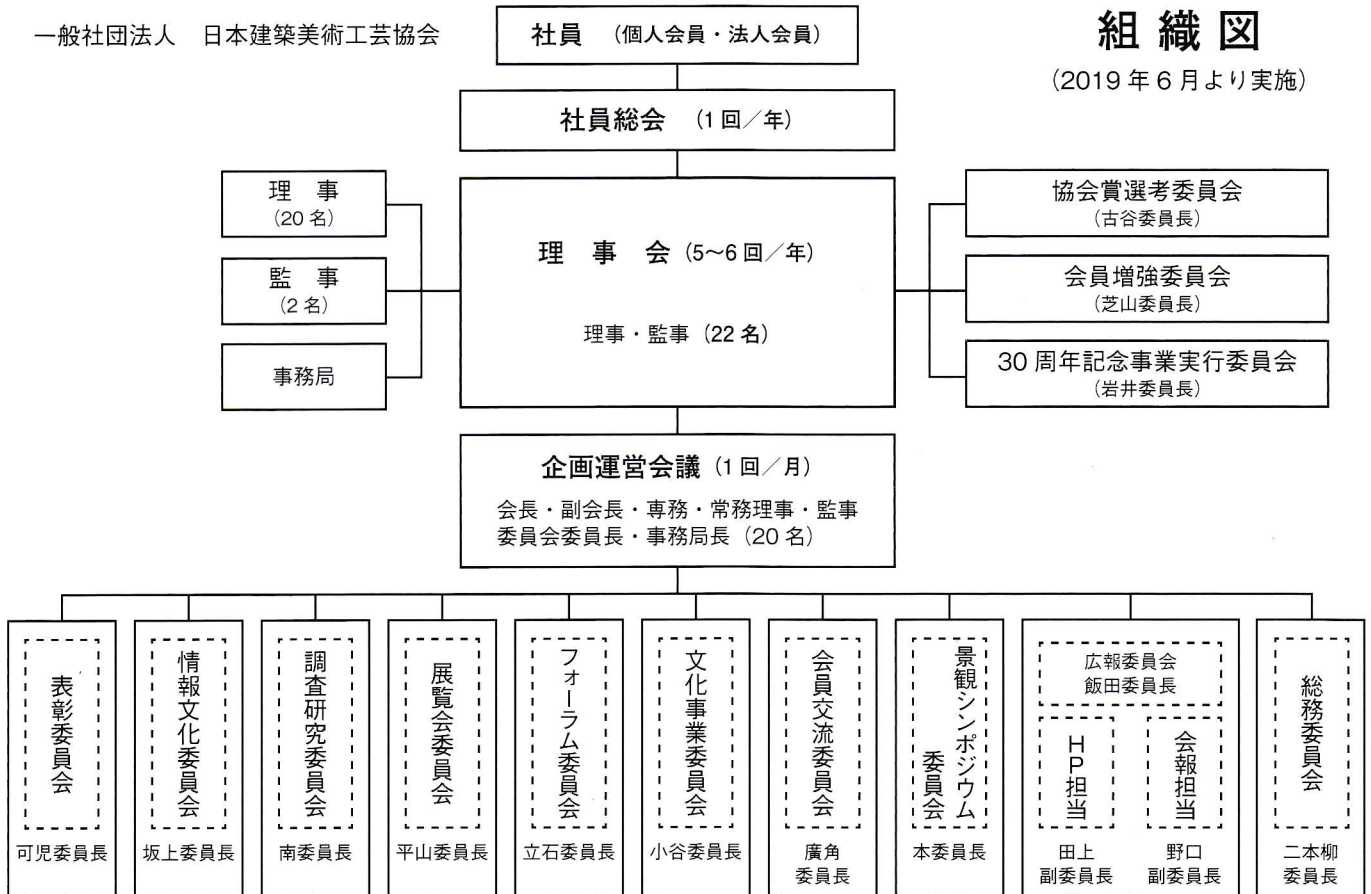
代表理事(会長)	岡本 賢	建築家
理事(副会長)	岩井 光男	建築家
理事(副会長)	岡 房信	岡計画事務所
理事(副会長)	安河内敦子	造形作家
理事(専務)	東條 隆郎	建築家・ 東條隆郎建築都市設計室
理事(常務)	大野 勝	(株)佐藤総合計画 顧問
理事(常務)	森 暢郎	建築家
理事	尾崎 勝	鹿島建設(株) 副社長執行役員
理事	亀井 忠夫	(株)日建設計 代表取締役社長
理事	斎藤 公男	建築家 日本大学名誉教授
理事	芝山 哲也	(株)ヴィジュアルヴィジョン
理事	菅 順二	(株)竹中工務店 常務執行役員
理事	中村 弘子	工芸家(ステンドグラス)・ケヤキスタジオ
理事	日置 滋	建築家・ 東京工業大学副学長
理事	平山 健雄	光ステンド工房代表
理事	福田 卓司	(株)日本設計
理事	本 耕一	森ビル(株) 顧問
理事	米林 雄一	彫刻家 東京藝術大学名誉教授
理事	石田 真人	事務局長
監事	森田 高年	森田事務所
監事	中野恵美子	工芸家(染織)

# 2019 年度協会組織図

一般社団法人 日本建築美術工芸協会

## 組織図

(2019年6月より実施)



◎常置委員会

- ・表彰委員会  
委員長 可児才介
- ・情報文化委員会  
委員長 坂上直哉  
副委員長 露口典子
- ・調査研究委員会  
委員長 南 三一郎  
副委員長 小野寺優元
- ・景観シンポジウム委員会  
委員長 本 耕一  
副委員長 小谷純造・島本健司  
高柳登美
- ・文化事業委員会  
委員長 小谷純造  
副委員長 島本健司・堀 剛  
二本柳 敏

・会員交流委員会

- 委員長 廣角京一
- 副委員長 青木 崇・白石健二  
二本柳 敏

・展覧会委員会

- 委員長 平山健雄
- 副委員長 山崎輝子

・フォーラム委員会

- 委員長 立石博巳
- 副委員長 池田明彦

・広報委員会

- 委員長 飯田郷介
- 副委員長 野口真理 (会報担当)
- 田上秀司 (HP担当)

・総務委員長

- 委員長 二本柳 敏
- 副委員長 立石博巳

◎特別委員会

- ・協会賞選考委員会  
委員長 古谷誠章  
副委員長 可児才介
- ・会員増強委員会  
委員長 芝山哲也
- ・30周年記念事業実行委員会  
委員長 岩井光男  
副委員長 飯田郷介・本多 陽

## 正統なモダニズムの継承者 芦原義信 (4)

広報委員会委員長 飯田郷介

### ● 街並みの美学

芦原義信は、昭和 35 年 (1960) 10 月、ロックフェラー財団から研究費を得て欧米に留学した。「一軒一軒の建物をたてているわれわれ建築家は、実際に都市のスカイラインをつくっているのに、一体、都市全体に貢献しているのか、あるいは害毒をながしているのかわからないまま、この自然発生的な建築群のエネルギーに流されている。かねて、この建築と建築との間にできる『外部空間』について、自然発生的にできるのではなく、意図的につくる方法はないものか、また、あるとすれば、それらの空間に存在する基本的原則はなにかということについて研究してみたいと思っていた」\*1と昭和 27 年 (1952) のハーバード大学留学以来、建築内部における空間構成、空間秩序の問題に興味を持っていた芦原義信は、これを建築と都市における「内的秩序」と「外的秩序」、建築と都市の間に「街」という中間項を挿入して、個々の建築の単位を群として街まで広げて考察することを考えて、論文をまとめ、昭和 36 年 (1961) 東京大学から学位を得た。そしてその翌年、彰国社から『外部空間の構成 建築から都市へ』を出版した。

この芦原義信の外部空間論から設計の仕事が舞い込んできた。ロータリークラブでの講演で「建物の屋上には塔屋というものがありますが、塔屋は建築家が建物の本体との関係でプロポーシオンをいろいろ考えて設計するのですが、その塔屋にいろんな広告物を取り付けるオーナーがいる。その中でも特に羽田の方から品川の方へ近よると、そこに富士フィルムの広告があります。それは白いネオンのたて線で構成されていて、上の方がそろっていなく波状になっている。それが遠くからみると塔屋が何かこう曲がったようにみえて非常に困るというような話をそのインニシエーション・スピーチの中でしたと思うんです。そのスピーチが終わったら、つかつかと一人の紳士が見えまして、『今の話は大変面白かった。私は富士フィルムの小林社長です。早速、宣伝の方へよくその話をして注意しておきましょう』というようなお話がありました。それ以来、小林社長とは非常に親しくしていただくようになりました」\*2と都市景観の話から交流がはじまり、富士フィルム本社ビル（東京都港区、1969）の設計をまかされることになった。富士フィルム本社ビルの計画では、芦原義信は様々なアーティストと協働し、インテリアデザイナーの剣持勇、陶芸家の会田雄亮、彫刻家伊原通夫、彫刻家井上武吉、照明デザイナーの氏伸介などのアーティストが参加して、インテリアデザ

イン、家具デザイン、サイン計画、視覚効果をねらった色彩計画などに携わった。

そして芦原義信の名著『街並みの美学』が、昭和 54 年 (1979) 東京大学での最終講義のあった 2 月 21 日に刊行された。これは建築とその外部空間を街並み・都市の規模にまで拡大し、パリ、地中海沿岸の諸都市、ベルシャ、ル・コルビュジェの一連のプロジェクト、ルチオ・コスタとオスカー・ニーマイヤーのブラジリアなどの都市における空間造形、建築と環境の空間論などを、建物の隣棟間隔 (D) と高さ (H) の比率やメツガーの人間の視覚の法則 (注) などの理論を導入して展開したもので、「執筆にあたっては、青春時代から私の座右の書であった和辻哲郎の『風土』の建築版を密かに目指しました」\*3 という芦原の学位論文以来の外部空間論を都市改造の提言まで含めて、集大成したものである。村松貞次郎は、「名著『街並みの美学』を退官記念講義の日に世に出している。これは、建築とその外部空間の関係を街並みの規模にまで拡大したもので、従来平面的、動線的な、いわば土木屋的な見地から機能的に論じられてきた都市の設計に、はじめて空間造型、建築と環境の論理的空間論を展開したのとして高く評価される。その感性における広量とその知性における明晰さを見事に示して、芦原の大学教授としての最高の業績といえよう。しかもそれは、非常に明快でわかり易い芦原得意の論理・語法で語られているので、一般市民にも大きな影響を与えた。彼はアメリカ留学中の見聞をもとに、日ごろ都市美とか建築美とかいう話は、建築の学生より法学部の学生などに聞かせるべきだ。やがて彼らは大統領、大臣になるかもしれない。とにかく行政の人たちにこうした観点からの教養を若いうちに持ってもらうのが肝要、ということを語っ



銀座ソニービル (1966 年)



ているが、『街並みの美学』は、その主張通りの大きな成果をあげつつあるように思える。ひとつふたつの建築の傑作を世に送り出すよりも、それは建築家として、はるかに大きな社会貢献でもあろう」\*4と最大の賛辞を送っている。

『街並みの美学』を纏めた芦原は、19世紀に完成した世界における最も美しい街であるといわれているパリなどの欧米都市と比較して日本の街並みについて「街路には電柱、電線、柱上トランス、アパートのベランダには色とりどりの洗濯ものや布団、建物の壁面には極彩色のそで看板、その上、道路は広くなったり狭くなったり、あっちに曲がったり、その道路にそってコンクリート・ブロック塀や、その上に鉄条網までつけてある。建物の敷地は勝手気ままに細分化され、そこに建つ建物は、あっちをむいたり、こっちをむいたり、一緒に建てれば階段やエレベーターも少なくすむのに、ひよろひよろのペンシル・ビルを建てる」\*5と厳しい視線を送っている。そして「わが国の都市はしっかりとじたビジョンもないまま幾多の試行錯誤をくりかえして、ついに、世界にこれとって誇ることでできない街並みと住環境をつくってしまった」\*6と都市全体の計画ビジョンが欠けていることを指摘している。

そして、現在、巨大な国際会議場「東京国際フォーラム」が建っている東京有楽町駅前の旧東京都庁舎跡地についても触れている。芦原義信は、「国際会議場の建築コンペティションより、その前に土地の有効利用の方法についてコンペティションをすべきであったと思うのである」と語り「たとえば、あの広い地上の空間は都民の広場や彫刻の森のような緑と文化性のあふれる空間とし」と広場の必要性を説いているが、芦原義信が設計した東京芸術劇場（東京都豊島区、1990）および池袋西口公園の計画には多くの芸術家

が参加して、内外空間に約四十点の作品が設置された。建物内部には、佐藤忠良のブロンズ像、絹谷幸二のフレスコ画、伊原通夫の懸崖彫刻、内井乃生のタペストリー、多田美波の壁画レリーフなどの作品が建築空間に溶け込み、来館者を和ませている。そして東京芸術劇場エントランス前の広場中央には、高さ10メートルのクレメント・ミドモアの曲線現代彫刻《CRESCEND》がこの境界のシンボルとなり、ここを中心に建昌覚造のモニュメント、朝倉響子の思わず触れたいくなるようなブロンズの婦人像などのパブリックアートや噴水、樹木などを配した、建築とアートが融合した、まさに芦原が目指した広場が創り出され、かつては風紀と治安が悪かった街に潤いを与えている。

\*

日本の無秩序な街づくり、全体的な発想が欠けた都市計画を憂い、パリのような文化の香りの高い街づくりに熱い情熱を傾けてきた芦原義信は、2003年9月、85年の人生に幕を閉じた。

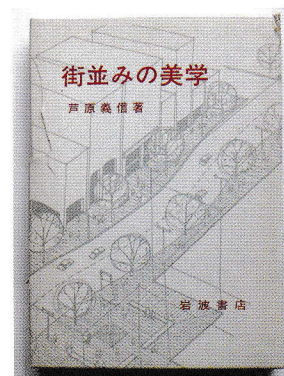
（注）メッツガーの『視覚の法則』（岩波書店）によれば、眼のなかに模索された形のうちで人間が実際に見ることができるのは「図形」とか「物」とか「立体」とかの印象を与えるものだけにかぎられるという。

出典

- \* 1 『外部空間の構成 建築から都市へ』 芦原義信著 彰国社
- \* 2 『建築空間の魅力 私の体験』 芦原義信著 彰国社
- \* 3 『建築家の履歴書』 芦原義信著 岩波書店
- \* 4 「正統なモダニズムの継承者」 村松貞次郎 『日本現代建築家シリーズ⑥』 新建築社
- \* 5 『隠れた秩序』 芦原義信著 中央公論社
- \* 6 『街並みの美学』 芦原義信著 岩波書店



東京芸術劇場（1990年）



（撮影：飯田郷介）

## 時代の華一輪

### あや 紋なす仕事



アートアソシエイツ八咫主宰  
情報文化委員会副委員長 露口典子

#### 職名のない仕事？

「紋なし人」—自分の仕事を考える時、浮かんでくる言葉だ。

展示会の企画・運営などにも関わっているが、これまで力を入れてきたのは、街や建物の中にアートワークを創出する仕事。

と言っても、私は作家（アーティスト）ではない。プロデューサー、ディレクター、オーガナイザー、コーディネーター、アドミニストレーター…カタカナ名称はどれもピンとこない。漱石流に言えば「吾輩の仕事はアートワークの創出である。職名はまだ無い。」となる。八咫という小さな事務所を立ち上げ仕事はしてきたが、今更ながら一般的に知られていない職種だと痛感する。aaca の中でさえ、スポットが当てられたことがない。

#### 関わりのアートワーク

目指してきたのは、設置される場所に於いてのみ成立する、その場所ならではのアートワークだ。美術館で展示されたり、市場で売買される作品は対象としてこなかった。街や建物の中に、何も無いところから創り上げていくワークは、人、モノ、場所、機能、地域、時間など様々な関わりの中から生まれてくるはずだ。独りよがりのワークであってはならない。そう考えている。

明治以降、西洋美術の影響の下に広がってきたアートの世界では、作家は自我と深く向き合って作品を創ってきた。それはそれで、数多くの素晴らしい作品が世にでてきたの

だが、それをそのまま、不特定多数の人たちが行き来する街や建物に設置しても、共感を得ることはあまり望めない。

「彫刻公害」とまで言われて、駅前や公共建築からアートが姿を消していく羽目になったことは記憶に新しい。では、どうすれば、設置場所にふさわしいワークができるのか？ 試行錯誤の連続だった。

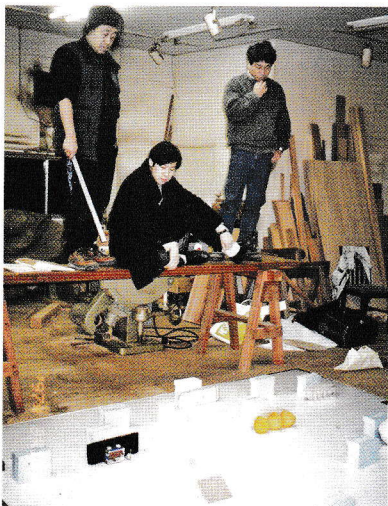
#### 「紋なし」システム

20 数年前、和歌山県立医科大学アートプロジェクトで、複数の作家による「紋なし」の試みを行った。当初、設計から示されたアートのテーマは「海と森—そして生命」だった。紀伊半島には、奥深い山と黒潮の流れる海がもたらした多様な生命が生息している。医科大学に相応しいテーマだったが、常に魂と向き合っている作家にとっては個人のイメージが広がりやすく、結果、個別のワークの寄せ集めになってしまう。

危惧を抱いて、まずは紀伊半島を巡り、資料を読み、ディスカッションを重ね、3冊の「プロデュースノート」を作った。生命の再生を意味する「和歌」を軸に、和歌山のモノやコトを経系にして、複数の作家に緯糸として入ってきてもらって、ここにしかない紋様（アートワーク）を創り出し、1枚の美しい織物を仕上げようと提言した。

今ようやく言われ始めてきた「共創」で、このノートを基に、これぞと思った多くの作家に会った。「トンデモない」「自分の表現が侵される」ほとんど断られた。途中で去った作家もいた。それでも最終的に11人の作家の参加を得た。

和歌山県立医科大学アートプロジェクトより



基礎臨床棟玄関ホール参加作家と  
(坂上直哉氏、山口啓介氏、高宮典夫氏)



基礎臨床棟玄関ホール参加作家3人との紋なしのFAX通信



初期基盤づくり参加作家と  
(野老朝雄氏、本人、坂上直哉氏、Stig L. Andersson 氏)



基礎臨床棟玄関ホール完成ワーク「紀国山海宝船」

### 共通基盤ありき

参加作家たちには頭の中だけでイメージを構築しないで欲しいと、紀伊半島を何度も引っ張り回し、共通の基盤（プラットフォーム）を築いていった。

特に、基礎臨床棟玄関ホールは3人の作家による共創を目指していたので、メールがない時代、FAXによる度重なる意見交換、数回にわたる合宿まで行った（左頁写真）。文章で、図形で、模型で、直接の言葉で、凄まじいバトルの連続で、どう集結させようかと悩みに悩んだ日々が続いた。

このようにして積み重ねていった「共通基盤」は落語の座布団のようなもの。座布団から離れると落語ではなくなるのと同じく、共通基盤からはみ出した発想には遠慮なく yellow や red card を出し、浮かび上がってきた紋様の片鱗と思えるものは、大いに掬い取って次に繋げる縁とする。

江戸の講には「お梭がかり」と呼ばれる役割があったそう。梭とは機織りの時に使う「シャトル」のこと。経糸の間をくぐりぬけては緯糸を通して美しい織物を仕上げていく。世話役のような存在だが、講と違うのは、「紋なす」アートのゴールは造形化にあるということだ。

イサム・ノグチ & ルイス・カーンの未完プロジェクトに於ける往復書簡の凄さと比較するのはおこがましいが、思い返すと、よくぞ最後の造形まで辿り着けたものだと思いに冷や汗が出る。

### 「紋なす」プロセス

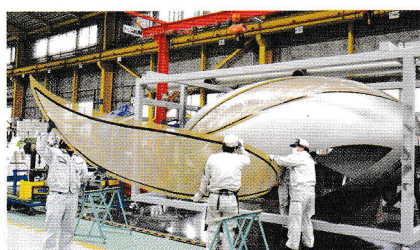
「紋なし」は作家が一人の場合にも必要だ。神田岩本町で

は、出土品調査、地域観察、聞き取り調査と、地域住民の方々と紋なしながら、作家と共にワークを提案し実現していった。翌年には、江戸をテーマにしたワークの絵解き『御城下町神田謎解講』を開いた。10年後、今度は町会からの要望があり、説明板を取り付けた。一部破損事故が起きたが、補修工事も行われ今も大切に守られている。

羽田空港では、日新製鋼、オハラ、日立、松下電工と、各企業の技術者たちとの紋なしによって2体の翼が実現した。一般的にアートは自由な発想と表現と思われているが、街や建物の中ではそうはいかない。寸法、重量、安全性、耐久性、メンテナンスなど手枷足枷の条件を、技術的にも表現的にもクリアしながら最終造形にまでもっていかなければならない。いくら力量がある作家でも独りでは大変だ。施主、設計、職人、技術者、施工者などとも紋なししていかなければ良いワークは創出できない。

この2体の翼は、何度か大掛かりなメンテナンスも行われ、25年間役目を果たしてきたが、昨年、オリンピック前の工事に伴って撤去の話が持ち上がった。しかし、幸運にも玉川学園に移設が決まり、来年早々には若者たちに夢を届けられるように、新しい施主との紋なしが始まっている。

建築家も作家も、独りでできることは限られている。様々な人やモノやコトとの「紋なしによるプロセス」が、空間を、人の心を豊かにするのではないだろうか。そして、そこには「紋なし人」という役割を担う職があることを思い出してもらえれば嬉しい。



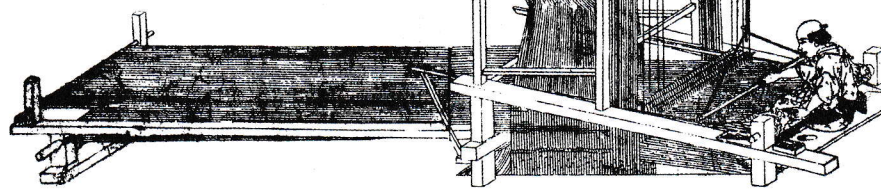
菊川工業・匠チームと（中京大学『翼竜のたまご』制作中）



ビデオ撮影スタッフと（羽田空港『青い翼』にて）  
（左端本人）



左官職人と（日本大学習志野高等学校サイン制作中）



西陣で使われた空引機（『都名所図絵』より）

## 会員活動レポート

# SAKURA 展・花の美を描く… 「島田恭子～桜の世界」

さくら市ミュージアム（3月23日～5月26日）開催  
ギャラリートーク（3月30日）より



陶芸家  
日本建築美術工芸協会会員  
島田恭子

今年は例年より桜の開花が遅く、やっと一・二輪咲き始めた日、東京から広報委員会・飯田委員長が「さくら市ミュージアム」のギャラリートークの為に来て下さった。

自分の作品について話すと言っても、思いや表現の意図などとなると言葉で言い表すのは難しく、また照れみいたいなものもあり苦手なので、今回のギャラリートークは出来るだけ制作工程について話してみることにした。

飯田委員長から今回の寄稿について依頼があり、会場でのそのままの話で大丈夫ですとおっしゃって頂いたので、私の作品の特徴とその制作工程について記します。



ギャラリートーク風景



会場

(1) 主な作品の成型は手びねりという手法で制作している。粘土をひも状にしたものを輪積みしていくのだが、一回にあまり無理をせず毎日5cmぐらいで止め、毎回きれいに内外をへらで扱き板状の粘土を張り合わせたような感じに仕上げていく。

(2) 成型の終わったものを、室内でゆっくり乾燥させていく。注意しなければならないことは、片乾きしないように布など覆いながら乾燥させる。大きい作品だと1か月以上かかる。完全に乾燥した後、素焼き（約700度）をする。

(3) 素焼きをしたものに布目を施す。（布目が作品の特徴でもある）

素焼きの素地に布目をつけることは出来ないなので、素地の上に白化粧の要領で白粘土を塗りその上に布を置き布目をつける。この後布を剥がさなければならないのだが、これが結構難しい。どうしても白粘土と一緒に剥がしてしまう。少しでも剥がれるところがあると見苦しいので布だけをきれいに剥がさなければならない。

(4) 布目の施されたものに下絵をつける。背景から色を入れていくのだが、吹き墨の要領で口を使って吹き付ける（大きな作品になると結構肺活量がいるが、よい運動にもなる・笑）

この時の色は焼き上がりの色とは全く違うので、今までの経験と勘と、また新たな試みとの中で挑戦する。やり直しはきかないのでこの時はいつも緊張する。

そのあと桜の花を描いていく。花は描くというより、色

をのせていくというような感じである。角度のある作品では釉が流れないように注意しなければならない。

絵を描き上げたら、全体に透明釉を掛け、本焼き（1250度）をする。

本焼きで絵のほとんどが焼きあがる。本焼きの後、金彩をつけ上絵焼き（800度）をして完成である。

簡単に制作工程をお話ししてみたが、特に特徴的なことは、

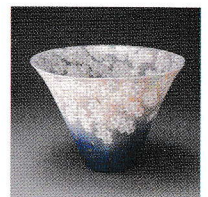
- ・素焼き地に生の粘土で白化粧し、布目を施す。
- ・生の白化粧（布目）の上に直接下絵を描いてしまう。
- ・本焼きで、白化粧（布目）+下絵+釉と幾層も重ねてしまう。

この様な技法は少し無謀なことをしていて、「技法」と言えないかもしれないが、このことで私の作品に特徴がある、という作品になっているのだと思う。

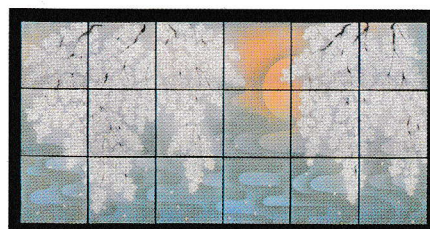
今年で日本橋高島屋の個展は20回目になるのだが、必ず何人かの方から、「見たことのない作品ですが、どなたの先生についたのですか?」とか、「これは何焼きですか?」などと声をかけられる。特別個性のある作品を作ろうと意識したわけではないが、脱サラから陶芸の道に入り、特別な勉強をしたわけではないので、ひとつひとつ試行錯誤しながら制作し、気が付いたら人のしていない技法で特徴のある作品を作っていたという感じである。

作家にとって特徴があると言われるのは嬉しいことのひとつである。

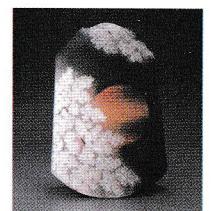
作品の完成を想像し、それに限りなく近く完成させるのが作家であると思うが、陶芸はとにかく窯に委ねる部分が非常に多い。もちろんそれも計算つくさなければならないのだが、・現実には本当に難しい。なかなか思うような作品にはならず、いつも次の作品ではああしよう、こうしよう。「では次回はなかなか良いものができるぞ」と錯覚しているこの時が一番幸せな時なのです。



大鉢「吉野」  
49×49×36



陶板「脛」230×120



扁壺「桜月夜」  
50×26×69

# 令和 / 人々が美しく 心を寄せ合う中で文化が生まれ育つ

ステンドグラス・工芸作家  
日本建築美術工芸協会会員  
上江洲牧子



道に落ちていたガラスを拾っては宝箱に入れていた幼少期。透き通りキラキラ輝く物が好きなのは大人になっても変わらず、現在はステンドグラスや箔工芸品を作っています。

ステンドグラスとの出逢いは高校時代、積極的な友人達に誘われて参加したイギリス・パリ研修旅行でした。初めての海外旅行はとても贅沢で初めて触れる異文化は全てが刺激的でした。特に何も知らされずに上った狭く暗い階段の先に現れた光の洪水が印象的だったサントシャベルは、もう一度パリを訪れたい理由の一つになりました。

アルバイトでようやく貯まったお金で一人旅をした大学時代。目的は小さな美術館をゆっくり巡る事でしたが、パイプオルガンの演奏を聴きながら見上げたノートルダム大聖堂のステンドグラスはもちろん、ガイドに載っていない小さな教会に足を運んだ事で間近でステンドグラスに触れることが出来、その素晴らしさにすっかり魅了されてしまいました。

卒業論文はステンドグラスをテーマにしたいと考えましたが、今のようにインターネットもまだ普及していない時代に資料の少なさから不可能だと分かりガラスの東西文化、ステンドグラスを中心に研究しました。

そこで板ガラスの製造方法の発展や、建築とガラスの関わりについて自分なりに学びました。親友が建築・インテリア学科だったこともあり、現代建築や家具にも興味が湧くようになりました。

日本へのステンドグラス技術の導入は政府によって進められた技術者養成の為の留学から始まり、ドイツ系(1886年)アメリカ系(1910年)二つの源流があります。

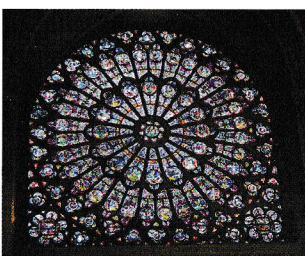
私も帰国後アメリカのティファニー氏が確立した銅箔テープでガラスの側面を覆い半田で形成する方法を学びましたが、鉛棧でガラスを組み半田付けしパテでガラスと鉛棧の隙間を埋めていくような本格的なステンドグラスは学べず、まして絵付けステンドグラスはとても特別な物だと分かりました。

論文の指導にあたってくださった堀尾真紀子先生はフランス留学の経験もありフリーダ・カーロの研究者で、ライフワー

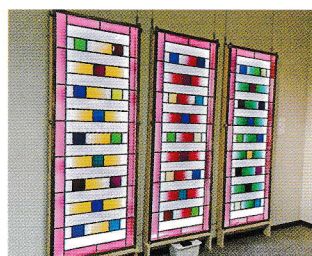
クとしてテーマに取り組む事を教えていただきました。そして進路について思いあぐねていた時、画家の田浦勝信氏の助言によって日本でフランス古典技法による絵付けステンドグラスを学べる場所に辿り着き、そこで複数の先生方から仲間と一緒に技術を学べた事は幸運だったと思います。

東日本大震災の後、心はとても敏感になり生きる意味・作る意味について悩んだ時期がありました。「光は神である」キリスト教徒でない私でも全身に浴びる光のシャワーは美しい音楽に触れた時のような感動を得ます。日本の建築では人工の光源によるステンドグラスの設置が多いのですが、自然光によるステンドグラスの光を多くの方に味わっていただきたいと願っています。

いつも笑顔で『もっと出来るはず!』と仰ってくださった田浦氏が4年前に突然亡くなった事で、私は今まで何をしていたのだろう?もう一度初心に戻ってステンドグラスに取り組みたいと考えるようになりました。育児を理由に休んだ間に失うものは大きいと恩師の平山健雄氏にお声を掛けていただいた事でaacaに入会し、その思いは更に増幅し都市づくりに影響を与える公共建築にステンドグラスを入れたいと強く思うようになりました。展示会中にノートルダムが火事になり、まず私の作品を見て共感し皆さん心が傷んだと仰ってくださいました。歴史そのものであるノートルダム「古いものこそが新しいものを生む!」その言葉の通り、コンペティションでどのような案が採用されるのか見守りつつ一日も早い復興をお祈りいたします。



2011年ノートルダム大聖堂バラ窓



2019年フローラル展 ステンドグラス  
[Light 黄・赤・緑] W610 H1700 D10 × 3



箔工芸作品 L'eau シリーズ



箔工芸作品ハートシリーズ  
[Mon Coeur] [Je] W110 H148 D38 × 2



ステンドグラス 『ヘローの童話』  
W360 H800 D10

# 建築×美術×都市

建築家 / 美術家

株式会社スペース・メニュー・ラボ 代表取締役

日本建築家協会・日本都市計画家協会会員

英国 Architectural Association 会員

日本建築美術工芸協会会員

齊木慶一



「建築・美術・都市」は自分にとって一本の線上にあります。キーワードは「関係性と変化」。私は立命館大学経営学部卒業後、ロンドンのゴールドスミスで現代アート、キングストン大学で空間デザイン、AA スクールで建築と都市構想を学び、建築家セドリック・プライスのもと都市プロジェクトに関わり現在に至ります。これまでのプロジェクトから建築、美術、都市の3つの事例を紹介します。

## 「変化する建築」 EVO 進化する家 (2002)

この住宅は、家族や周辺環境の変化に対応する家として首都圏郊外の発展途上中ベッドタウンに計画されました。進学・就職・結婚・出産・転勤・退職・老後・二世帯など家族構成や空間利用の変化、近隣建物やコミュニティとの関係変化、一部賃貸や商業的使用の可能性などへの適応も想定しています。建築は、(3.6m × 3.6m × H3m) × (4 × 4 × 3層) のグリッドで構成され、増築・減築・組替しやすい構造とするため鉄骨フレームで空中敷地を形成し、木造の構造体を組込む混構造としています。ここで目指した建築は、新築時に完成される建築でなく、常に変化する関係性とともに姿を変える不確定な建築です。

## 「変化する美術」 結界 (2016)

この彫刻は、鹿島 KI ビルのアトリウム空間を想定して制作されました。H180cm × W90cm × D90cm の作品は、身体スケールとダイレクトに呼応し、身体スケールをモジュールとした建築空間とも呼応します。常に変化する自然・人工環境、多層かつ360度の多視点、空間移動による視点変化などに対応し、彫刻も常に姿を変えます。ここでは、物体としての彫刻より、関係性に力点が置かれます。

「建築、空間、都市との関わりの中で思考し続けてきたものが一つのカタチになり、空間の中で領域を生み出す一つのものとなる。それは物語や音楽への扉でもある。彫刻は物体と空間との境を行き来し、概念に近づいていく。それは存在そのものへの問いでもある。」

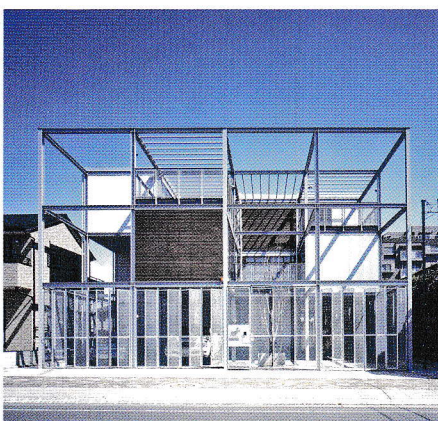
## 「変化する都市」

### テムズ川のための浮遊式人工地盤計画 (1995)

この都市提案は、ロンドンのテムズ川流域約1000haを直接的敷地、関係するロンドン市全域を間接的敷地として計画されました。河川とともに発展した既存都市構造を活かす新たなシステムを導入し、より多様な社会参加型都市を目指しています。多数の浮体構造人工地盤ユニットは様々な要求に対応して、編成・再編成を繰り返し、仮設の「橋、島、河岸拡張」や他の機能をもつ多種多様な姿に変化します。様々なプログラムは、アイデアやヒントを提供する市民と専門家の協業により生み出されます。このシステムは、協調性群ロボット、人工知能、位置計測、予報、データ解析、流体力学、浮構造、ナビゲーション、新素材ほか様々な技術の組合せによって実現されることを想定しています。都市の繋ぎ方を変えるこの可動インフラは、先端技術の応用、生産・再生産・再利用、産業としての社会参加など、新たな可能性を広げる事も目的としています。

## 「現れること、消えること」

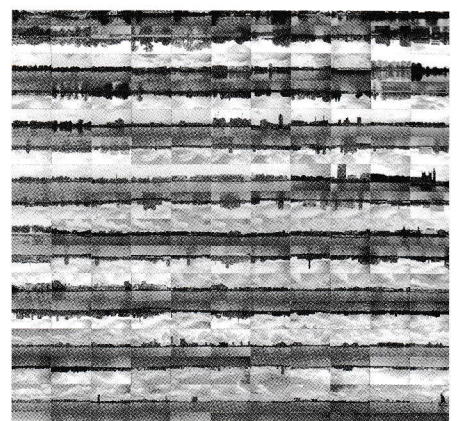
変化に対応することは、「現れること、消えること」の美しさを感じることにもつながります。即興演奏家が、変化する時空間と対話しながら自由に音を紡ぎ出すように、「建築・美術・都市」と関わっていければと思っています。



「EVO 進化する家」



「結界」 第14回 KAJIMA 彫刻コンクール金賞



「テムズ川のための浮遊式人工地盤計画」(AA スクール)

## 美術展の企画から展示“四方山話”

六花亭製菓中札内美術村館長 飯田郷介  
 広報委員会委員長

六花亭製菓では、相原求一朗生誕100年、没後20年を記念して「相原求一朗の軌跡」展を北海道立近代美術館（札幌市）で今年の4月19日から5月26日まで開催しました。川越市立美術館、相原求一朗美術館（中札内美術村）、株式会社AOKIホールディングスの所蔵を中心に、今回は秋田県立近代美術館、ひろしま美術館、富山県美術館、北海道立近代美術館などからも作品をお借りして、150号の最期の大作「天と地」を始め、「北の十名山」など北海道の風景を中心に82点の作品を展示しました。私は、その企画から展示、そして閉幕までの全体に関りましたので、皆様があまり目にしない裏方の仕事などをご紹介します。

本展覧会は、5年前に計画が始まりました。一般的に美術館の展覧会企画は、5、6年前から始まり、大きな展覧会では10年以上前から企画が動きだすものもあります。今回は、相原画伯の作品をまとめて所蔵する川越市立美術館（川越会場）、相原求一朗美術館（札幌会場）、AOKIホールディングス（長野会場）の3者で巡回展を開催することになり、2015年3月に3者のキックオフが行われスタートしました。相原求一朗美術館では展示しきれないこともあり札幌会場は、北海道立近代美術館をお借りすることになり、この年の4月には北海道立近代美術館にご挨拶に伺いました。まずこれが大変ねばりの必要な仕事でした。北海道立近代美術館は、毎年殆ど自主企画展に使用され、またそれらが3～5年前から企画され、日程調整が始められます。そこに割り込んでいくために、ご挨拶、お手紙で様子を伺い、2年前に正式に開催日程が決まり、開催前年の2018年2月に札幌会場関係会社の打合せを開始、展示計画がスタートしました。今回は、貸館としての企画展ですから北海道立近代美術館はノータッチですので、すべて我々でやらなければならない、不安が一杯でした。川越会場（前後期開催）の約110点の作品を札幌会場の広さに合わせて展示作品を82点に絞り込み、会場のレイアウト検討を行い、3月には展示室

造作プラン（第一次案）を作成、このころからNHK「日曜美術館」（2018年12月放送）の取材も始まりました。

そして作品の搬送計画（作品の集荷、3会場への搬送、展示終了後の返却）が立てられ、8月から借用する作品の集荷が始まり、11月には帯広からの集荷に立ち会いました。その集荷作業が進むなか、図録の制作、札幌会場のポスター、チラシ、チケットの制作、ミュージアムグッズ販売の委託契約などを進める中、まず川越会場が2018年12月1日にオープンし、3月24日に終了すると、いよいよ札幌会場の準備です。

八戸港からフェリーで苫小牧港に着いたトラックが、2019年4月15日の昼、札幌会場へ到着しました。早速、作品の梱包を開け、まず作品のキズのチェック、そして順次取り付けです。当館には専門の学芸員がいないため、チェックは川越市立美術館の学芸員にお願いしました。毎日久々に地下鉄通勤でした。二日目も開包、チェック、取り付け作業を終日続け、貸館ですので19時に終了しホテルへ、疲れ果てていたため夜は一人でステーキを食べ、元気を取り戻しました。三日目は、一部残っていた作品の取り付け、キャプションの取り付けなどを行い、午後からスポットライトの取り付けが19時までかかりました。四日目は午前中に照明の調整を終え、午後には、会場の監視員へのレクチャーを行い、準備作業完了です。誰もいない会場を一人で歩くと、満足感、幸福感がじわじわと湧いてきました。いよいよ明日、開場です。夜は、十勝牛で前夜祭。翌4月19日9時30分に開場。開場前から並ばれているお客様もいらっしやうり、初日から順調な入りとなりました。

34日間の会期中、北海道内外からのお客様もご案内するため、何度も会場に足を運び、そして毎日の入りを心配していましたが、相原求一朗の北海道風景作品のファンも予想をはるかに超え、20,517人の入館者がありました。開催に携われた関係者の皆様、そして美術展に足を運んでくださったお客様方に感謝しております。



北海道立近代美術館



展示作業



オープン前日の展示会場

# TOTO 株式会社を訪ねて

広報委員会

日本建築美術工芸協会に1992年に入会されたTOTO株式会社は、1917年に東洋陶器株式会社として創立されたことに始まり、そのルーツは、森村市左衛門が、開国後に大量の金が海外へ流失することを憂い、1876年に森村組（現・森村商事株式会社）を創立して海外への食器・花瓶などの輸出を行ったことに始まります。さらに白色硬質磁器を広く海外に輸出し、日本の貿易の隆盛に貢献することを目的に、1904年日本陶器合名会社（現・株式会社ノリタケカンパニーリミテド）を創立しました。そして、日本陶器内に製陶研究所を設立して、1914年に国産初の腰掛式水洗便器開発に成功した大倉和親は、1917年衛生陶器の製造・販売を目的とする東洋陶器株式会社を創立して初代社長となりました。1970年には、住宅設備機器の品揃いが充実したのを機に、東陶機器株式会社へと社名変更し、1980年には温水洗浄便座「ウォシュレット」を発売、さらに2007年には、TOTO株式会社へ社名変更しています。

TOTOでは、「グローバル住設事業」と「新領域事業（セラミック事業、環境材事業）」の2つの事業軸をかけた、「グローバル住設事業」では、日本国内、中国・アジア、米州・欧州へと事業を展開し、「セラミック事業」では、半導体・液晶製造装置分野や光通信分野で高品質・高精度セラミック商品を、「環境建材事業」では、環境浄化技術「ハイドロテクト」を応用した建材商品の事業を展開されています。

またTOTOでは、経営とCSRのさらなる一体化を図り、「TOTOグローバル環境ビジョン」をスタートし、「きれいと快適」、「環境」、「人とのつながり」の三つのグローバル環境目標を掲げて、「TOTO水環境基金、ボランティア活動」、「TOTOギャラリー・間、TOTO出版」、「TOTOミュージアム」のCSR活動にも取り組まれています。

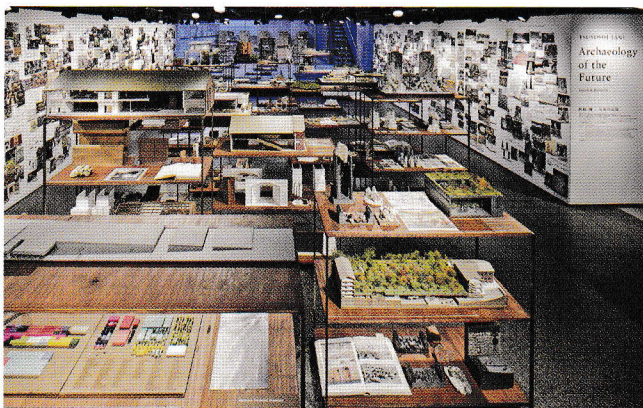
## TOTO水環境基金、ボランティア活動

市民による環境に関する取り組みを支援することを目的とした「TOTO水環境基金」が2005年に設立されました。この基金は、一時的な助成金による経済的支援だけではなく、支援した団体の取り組みが定着して広がることも期待し、またTOTO社員自ら参加できるという仕組みが特徴で、社員の関りを深め、自主的な参加を促しています。このため神奈川県茅ヶ崎市の海岸清掃などでは、TOTO水環境基金の助成が終了した後も、社員の参加が続いているそうです。

2007年からは、助成の対象地域を日本国内からアジアへも拡大し、ベトナムで世帯用のトイレ建設と衛生指導を行っている団体やミャンマーで水道整備を行っている団体などを支援され、その支援は、2017年度までに中国やフィリピン、カンボジア、インド、モザンビーク共和国など13か国に及んでいるそうです。

## TOTOギャラリー・間、TOTO出版

TOTOでは、事業活動に関するアドバイスを受けるため、1984年7月、委員長をグラフィックデザイナーの田中一光氏に、委員を建築家安藤忠雄氏、デザイナー川上元美氏、プロダクトデザイナー黒川雅之氏、インテリア・デザイナー杉本貴志氏に委嘱して、デザイン顧問委員会（Design Advisory Committee）を設置しました。そして、「建築家、デザイナーのための作品発表のギャラリーとして、プロを集めること」、「企業の宣伝とは見せない運営、すなわち社会還元、文化活動であるという姿勢を貫くこと」というアドバイスを得て、1985年10月、「ギャラリー・間」（東京都



TOTOギャラリー・間「田根 剛」未来の記憶 Archaeology of the Future— Search & Research」（2018年）  
@Nacása & Partners Inc.

TOTO出版

@Yukikazu Ito



港区乃木坂) が開設されました。「間」という名称は、人間・時間・空間それぞれの間合いという意味が込められています。そして、国内外の建築家やデザイナーを紹介する展覧会や講演会、各種イベントを開催され、展覧会では、「現在、アクティブに活動している人。将来の活躍が期待できる人」が取り上げられています。現在は特別顧問に建築家・安藤忠雄氏、建築家・妹島和世氏、建築家・千葉学氏、建築家・塚本由晴氏、建築評論家・エルウィン・ビライ氏の4名が運営委員に就き、さらに名称も「TOTO ギャラリー・間」と変更されました。

TOTO ギャラリー・間では、展覧会と連動して、講演会やシンポジウム、多彩なゲストを迎えたギャラリートークなどのイベントを通して、建築家自身の言葉でそのメッセージを直接伝える活動を続け、「レンゾ・ピアノ展 アウト・オブ・ザ・ブルー」(1998年)、「安藤忠雄展 挑戦—原点から—」(2008年)、「スタジオ・ムンバイ展 PRAXIS」(2012年)、「藤本壮介展 未来の未来」(2015年)、「坂茂展 プロジェクト・イン・プログレス」(2017年)などが開催され、開催展覧会は165回、(2019年3月現在)に達しています。

また、1989年11月には、「TOTO 出版」がスタートしました。当初は、「都市・人・水」をキーワードにTOTOが本業としている事業領域に関する専門書から、都市と人との問題や人と水との関りなどをテーマにした出版活動を行っていましたが、しだいに建築分野の書籍へとシフトしていき、1994年『建築 MAP 東京』を皮切りに11巻発行し、全国の建築を紹介してきました。また『地球家族』シリーズとして、世界各国の住まい・暮らし・食の事情を紹介した写真集を刊行し、ロングセラーとなっています。TOTO

出版の活動形態は、企業出版に分類され、出版事業単体の収支のみにとらわれずに活動を進められるという強みを生かして、社会のニーズはあるが、企業出版でなければできない書籍の出版に挑戦され、建築・デザイン・生活文化の向上に貢献されています。

### TOTOミュージアム

2017年度の創立100周年を控え、2015年8月、北九州市の本社・小倉第一工場の敷地内に「TOTOミュージアム」がオープンしました。ミュージアムは、4つの展示室から構成され、第1展示室「TOTOのルーツと歴史」では、ミュージアムのオープンに合わせて製作された国産初となる陶器製の腰掛式水洗便器の復元品、東洋陶器株式会社時代に生産された食器、初代「ウォッシュレットG」など、さらには、森村グループ各社やTOTOの略史を展示・紹介しています。第2展示室「創業の想いとTOTOのものづくり」では、大倉和親初代社長を中心とした先人の“こころざし”の紹介と共に、日本における水まわりの変遷や、衛生陶器をはじめTOTOの歴代商品が展示され、中には、1964年に開催された東京オリンピックに向け、日本初の超高層ホテル「ホテルニューオータニ」で大量の浴室工事を短期間で完成させるために開発された日本初のユニットバスルーム (JIS規定による) が展示されています。第3展示室「未来へ、また世界へ」では、さまざまな国・地域で展開している商品が展示され、「特別展示室」では、企画展が随時開催されています。

TOTOミュージアムは、国内の企業ミュージアムとしては規模も大きく、また展示の内容も多方面にわたり、無料で一日楽しめるお勧めのミュージアムです。

(飯田郷介・松本治子)



TOTOミュージアム

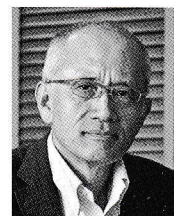


TOTOミュージアム内観

写真提供: TOTO

## GINZA SIX と銀座の街における 「多様性」「回遊性」「持続性」

鹿島建設株式会社  
建築設計本部  
専任マネージャー  
日本建築美術工芸協会法人会員  
坂本弘之



先日の aaca 講演会では、銀座の街における「多様性」「回遊性」「持続性」というキーワードから GINZA SIX を考えてみました。

「多様性」は、「銀座デザインルール」の中でも、“多様な用途や活動によるシナジー効果が期待されている”と書かれているように、銀座を訪れる人を新たに呼び込むために必要なものと思います。銀座についてよく使われる「伝統と革新」という言葉も、時間の経過による「多様性」について言及していると言えます。また、少し強引ですが、単に多様であればよいというのではなく、「銀座フィルター」という言葉があるように、「多様性」の中から銀座の歴史による淘汰があって、初めて、この言葉は成立していると思います。

具体的な GINZA SIX の多様性については、まず屋上にある GINZA SIX ガーデンが、銀座ではめずらしい 4000㎡の規模に 2000㎡の緑化を行った屋上庭園として街を訪れる人の憩いの場であると同時に、期間限定でカフェをオープンしたり、チームラボによる光のインスタレーションなど、テンポラリーな形で様々なイベントが開催されていることです。昨年5月には、観世会による薪能も開催されました。またオフィス空間では、様々なテナントが様々な規模のオフィスを借りられるようフレキシブルなプランニングとしました。商業空間では、様々なアートとショッピングエリアが共存して、モノを買うだけでなくスペースとしました。地下3階にある観世能楽堂では、伝統芸能である能を鑑賞できる他、多目的ホールとしての様々な利用が可能になっています。

「回遊性」は、銀座では「銀ブラ」といわれるように、面的な広がりがあり、通りだけではなく、路地を散策する楽しさがあり、割りと認知されている言葉だと思います。建築をつくる側からいうと、建築と都市のインタラクティブな関係をつくることと言えます。

銀座通りと三原通りをつなぐ「銀座パサーージュ」、その先には、拡幅された三原通り上空に「三原テラス」があり、建物内外の回遊性を増しています。また建物を貫通する旧区道部分では、車道と歩道を分離して安全で、且つ賑わいのある歩行者空間を確保し、さらに地下鉄銀座駅とは地下通路で結ばれています。GINZA SIX のような大規模な建築をつくる時、人の流れを止める事のないよう、敷地外や道路にまで設計の関与を広げ、回遊性を増進することは重要なことだと思います。

最後の「持続性」は、銀座のような成熟した街をどのように継承していくかということです。広い意味でいうと、銀座のまちづくり協議会の活動そのものが、「持続性」を考えたものであり、銀座の魅力を支えていると思います。都市のファサードや通りのにぎわいを持続させるために、単にファサードをデザインするのではなく、デザインシステム自体を提案すること、中央通りに 110 メートルの長さのファサードをつくるのに、1人の設計者がデザインするのではなく、また、それぞれの店舗が勝手にデザインするのではなく、設計基準を示して街並みのデザインをつくる試みです。具体的には、「ひさし」と「のれん」のデザインシステムを提案、「ひさし」は GINZA SIX の建物の統一感を表し、それに対比する形で「ひさし」に「のれん」を吊り下げること、通りに賑わいを創出しています。日本特有の「のれん」ですが、店先に「のれん」をかけるように各ブランドがファサードをデザインする仕組みです。

「多様性」「回遊性」「持続性」というキーワードで GINZA SIX を考えてみましたが、簡単に三つに分けられるものではなく、「空間」と「時間」（あるいは「歴史」）が複雑に重なり合って成立しているものです。この空間と時間の積層のようなものから、今後、銀座という街の新しい個性が生まれてくるように思います。GINZA SIX が、少しでも、そうした事に貢献できればと思います。



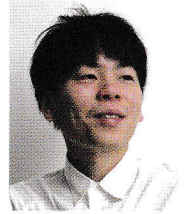
SS Co., Ltd. Naomichi Sode



SS Co., Ltd. Naomichi Sode

# 東急プラザ 「光の器」－ vessel of light －

株式会社 日建設計  
設計部門アソシエイト  
日本建築美術工芸協会法人会員  
畑野 了



## <vessel of light>

「東急プラザ銀座」は、日本最大の商業地である銀座の数寄屋橋交差点に面した敷地に建つ述べ面積約 50,000㎡の大型商業施設である。有楽町、日比谷方面と接続する「銀座のゲート」とも言える場所にあり、4方が道路に面した銀座でも希少な1ブロックの開発である。

我々は「光の器」というコンセプトの下、日本の伝統工芸である「江戸切子」をモチーフにした、ガラスの「器」をデザインした。外装をガラスという透明な素材によって構成する事で、施設内部の賑いを街へ伝え、同時に街から施設の賑いを感じ取ることが出来る、街との関係性を作り出す商業施設を実現したいと考えた。また同時に外装ガラスを立体的に構成する事で、太陽光の透過や反射など複雑な光の現象を起こし、時間や天候によって様々な表情を持つファサードを作り出した。周辺建物や天候を内外境界面であるファサードに映し出す事で、シンボリックな形状を持ちながらも街の風景の一部として、銀座の街へ調和する事を目指している。

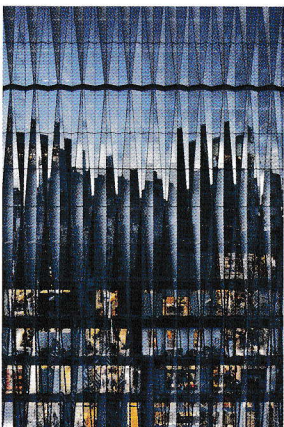
## <都市の現象としてのfacade>

この「器」の外装は立体的なガラスで出来ており、その形状によって、複雑な光の反射と透過の現象をファサードに映し出す。すなわち街の風景や、内部の商環境、この建築を取り巻くコンテクストを一度分解し、再構築する事で、都市の現象そのものをファサードとして建築を構成している。ガラスカーテンウォールは、外装面にサッシを出さないディテールにするため、SSG 構法を採用している。また外装のパターンは奥行 500mm の出入りを利用しながら6層

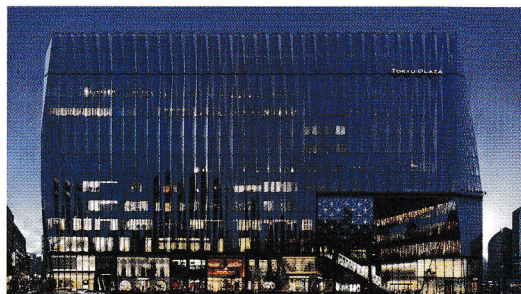
で一つの凹型の立体的なひし形を形成し、まさにガラスを掘り込んだようなデザインとし、他の一般的な建築に比べて大きなパターンを作り出す事で、都市の中に今までにないスケール感を実現している。また1ユニットを高透過ガラスと熱線反射ガラスの2種類の異形ガラスで構成することで、外装の立体的な形状をより強調し、高透過ガラス部は粗密を持たせた1mmドットのセラミックプリントを設け、アルミ方立に組み込んだ夜間外装照明の受光面としても機能している。

## <立体化するpublic space>

屋上には街の眺望を楽しむ事が出来る「KIRIKO テラス」、6Fには自然光が挿し込む巨大な吹抜け空間を持つ「KIRIKO ラウンジ」を設けた。また地上足元空間に隣接する数寄屋橋公園と、地下東京メトロ丸ノ内線と接続する地下コンコースのリニューアルを行い、施設を訪れる買物客が、ゆっくりと思いつきの時間を過ごすことができる場所を設けた。これらのパブリックスペースは、街からもその賑いを感じられ、街の魅力を満喫できるよう、トラフィックが集中する数寄屋橋交差点に面したスペースに配置した。一般的な街では、街中に配置されるパブリックスペースが街の魅力を引き出す事になるが、銀座のように敷地に余白がない高密度な街においては、建物の上層階にパブリックスペースを設ける事で、そこに人が集まり、街と建築に連続性が生まれ、街の魅力が増す。都市空間をより立体的に捉え直す事で、新しい街の賑いを生み出すきっかけを作りたいと考えた。



南西面外装  
© Koji Fujii / Nacasa&Partners Inc.



南西立面全景



© Koji Fujii / Nacasa&Partners Inc. KIRIKO ラウンジからの夜景 © Koji Fujii / Nacasa&Partners Inc.

# GINZA PLACE 新しい銀座のアイコン – FRETWORK –

大成建設株式会社  
設計本部  
日本建築美術工芸協会法人会員  
山本 実



銀座プレイスは、世界有数の商業エリアである銀座の中心に位置する四丁目交差点に面しています。この恵まれたロケーションを踏まえ、国内外から訪れる人々との交流の場となり、世界へ向けて日本を発信する拠点として整備して行こうという、事業者の想いを実現することを目指して計画がスタートしました。

また、未来に向けて持続的に発展するために、街と共に繁栄する施設を理想として目標を定めました。

銀座の街は江戸時代の60間（約120m）の町割りが基本となり骨格が形成されており、その碁盤状の端正な区画を生かして、現在の銀座の賑わいが築かれています。大通りとサブ的な通り、そして路地からなるヒエラルキーのある通りが重層的に構成され、多様で個性的な通りが連続してつながることにより、銀座独自の面的に広がる賑わいが形成されています。

銀座の中央通りは街路樹がないため、街のイメージを作る上で建物ファサードの重要性がより高いものとなっています。現在は、容積率・建物高さの緩和と賑わい系用途を誘導する新しい銀座ルール（地区計画）が制定され、未来に向けてさらなる発展を目指して街が変わろうとしています。

当計画では、緩和を受けて引き上げられた建物高さを最大限生かすため、地上の賑わいに縦方向の通りを新たに加えて街のアクティビティを上層部に引き上げることを試みました。

メインエントランスや地下鉄からの入口を交差点に向けた角部に設置して交差点からスムーズに建物内に誘導し、地上階～7階をつなぐエスカレータを接続させることにより、街路と連続した縦動線を作り出しています。

また、3、7階に設けたテラスを通して銀座の街の活気を感じながら縦方向に移動することができ、銀プラと同じような感覚を建物内に持ち込んでいます。交差点に向けて設置されたテラスは、街の視線を上方に向け、街と見る見られるの関係を作り出して一体感を高める効果も期待できます。

外観デザインは、クライндаイサムアーキテクトによるもので、建物が目指す方向を共有しながら新しい銀座のアイコン的な存在となることを目指しました。

銀座らしい品格と目を引くデザインを両立させるため透かし彫りの白磁をイメージしたものとし、デザインパターンにだまし絵的な要素を取り入れることで、事業性を考慮して敷地いっぱい建てられた平面性の高いファサードに立体感を与え、上昇感と躍動感を表現しています。この意匠を実現するために、外壁はダブルスキンとして、外皮に約5300枚、73パターンの純白の化粧パネルを設置する構成としています。高精度で取り付けることが要求されるこのファサードは、銀座にふさわしい質感を持たせるために凹凸をつけて陰影を創出したパネルの一つ一つを手作業で作っており、海外に向けて日本の高い技術・クラフトマンシップを発信しています。

夜間の演出照明は、二重構成の外壁を利用して化粧パネルの開口部を照らすことで、透かし彫りを表現しました。この光に、点滅する動きと合わせて色彩の変化を加えることで、季節や時間帯に合わせて多彩な演出をすることを可能としています。街の魅力となっている銀座和光の時を知らせる鐘の音と協奏（シンクロ）しながら、街に新たな魅力を吹き込むことで、街と協奏しながら共に発展して行く施設とすることを目指しました。



交差点からの全景（撮影：Naoki Kumagai / 三輪晃久写真研究所）



エントランス夜景（撮影：Naoki Kumagai / 三輪晃久写真研究所）

## 第28回 日本建築美術工芸協会賞を受賞して

# 越後妻有文化ホール・ 十日町中央公民館（光織り）



美術家  
日本建築美術工芸協会会員  
高橋 匠太

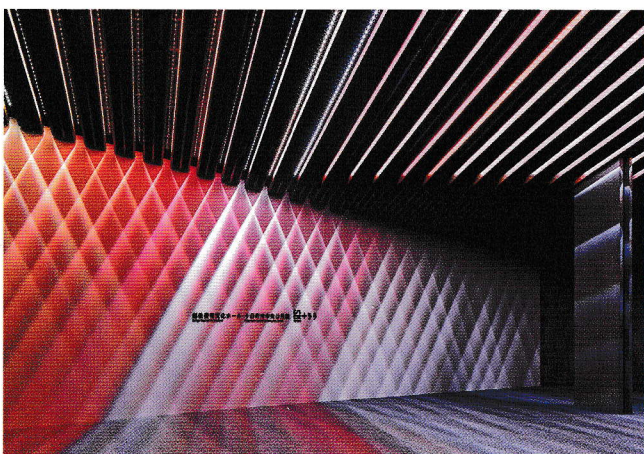
『光り織』は、単独のアートとしての存在を超え文化拠点としての建物の存在意義を際立たせる役割を果たしたに止まらず、十日町の持つ豊かな地方文化を斬新な表現で現代に蘇らせ、未来へと継承する手がかりを作った。設立30周年記念美術工芸賞にふさわしい作品である。」。選考委員近田玲子先生による審査員評の結びの言葉は間違いなく僕の人生における「宝もの」です。

「光」を素材とする作品が、「美術工芸作品」として認められたことの喜びはひとしおです。僕は京都市立芸術大学彫刻専攻科で彫刻を学び、物質と重力との格闘の日々の中、軽やかな「光」に出会いました。以来、僕の素材は「光」です。光の作品の魅力はその自由さや軽さ、言い換えれば「儚さ」です。しかし、その「儚さ」故に演出性が前面に立ち、芸術表現としては往々にして作品の自律性を問われることが多く、かけだしの若い時には悔しい思いもしてきました。

受賞の瞬間、建築家、アートコーディネーター、照明設計者、電気設計者、そして十日町の人々、作品に関わった全ての方々が喜ぶ顔が脳裏をかすめました。本作品は「アートのために用意された空間に設える作品」ではなく、まさに建築家と美術家がコンセプトを共有し、対等な立場で協働し、それを支える全ての技術者がおのおのの職能を発揮して実現しました。

今回の作品に取組みで一番最初に決めたことは、十日町に対して心からのリスペクトを作品に込めることでした。

十日町市は、「大地の芸術の里」や「雪まつり」などで、人と自然の関わりについての可能性を発信している町で



越後妻有文化ホール・十日町中央公民館（光織り）

す。美しい自然、里山の暮らしと現代アートが調和し、魅力的な空間を作っています。

世界有数の豪雪地であるという土地の特徴をアートの力で地域の魅力に変えるべく、僕は毎年、『Gift for Frozen Village - 光の花畑 -』の制作のために厳冬の十日町に赴いています。1.3ヘクタールの白銀の雪原に、LEDの「光のたね」を3万個あまり植え、一夜限りの『光の花畑』を雪原に出現させる大規模なプロジェクトです。幾数もの光の粒に包まれる体験が好評で、今年で9回目を迎えます。

作品の準備のために地元のサポーター、県外ボランティアなど多くの人と協働します。一週間以上も制作の時間を過ごす中で、十日町の四季の自然、街の歴史を教えられます。地域の人を知り、彼らの郷土愛に触れ、僕も十日町を好きになりました。

織物産業の盛衰についてもこの制作期間中に教えられた話の一つです。

建築パースを見た瞬間、そのファサードの特徴を作る約100mのエントランス回廊の「雁木ギャラリー」と町の伝統産業である「織物」が僕の脳内で結びつき、インスピレーションが湧きました。光の「線」の集積が、雁木ギャラリーの天井全体で「面」の表現となるイメージです。光の縦糸が織りなす全長100mの光の織物。それが『光り織』です。

十日町の織物についてリサーチするべく訪れた十日町市博物館で明石縮（あかしちぢみ）の見本裂（みほんぎれ）に出会ったことが作品を大きく決定づけました。十日町の織物産業が隆盛を極めた大正期の見本裂から、和洋折衷のモダンなデザイン、糸の色彩、織りの技術が凝縮されており、当時の先端産業が垣間見えます。時代を超えて、現代に生きる僕の日にも新鮮に映りました。素材を現代の技術を駆使した「光」へと替え、未来へと伝統文化を継承したいという思いを作品に込めました。

今年も雪原に『光の花畑』を制作するため、雪の十日町に滞在しています。

地元の制作サポーターの方に、「『光り織』を見て感動しました。素晴らしい作品をこの街のために作ってくださって「ありがとう」と伝えたくて、今日は来ました。」と嬉しい言葉を頂きました。

街の人に「ありがとう」と言ってもらえる作品『光り織』も、僕も本当に幸せものです。

# AI 時代の手の仕事 —これまでの手仕事とこれからの手仕事—



染色作家  
東京造形大学名誉教授  
大橋正芳

## AIと手仕事

手仕事は、例えば焼き物でしたら、陶工が手でロクロを引きますが、足はロクロを蹴り、目は形を追い、仕事の段取りを考えるなど、手ばかりか全身全霊が働きます。徹夜で窯焚きもしますし、地域の付き合いなどもこなします。例えばシンプルな皿一枚でもそこに人の気配を感じる……これが手仕事の魅力なのだと思います。

NHK の E テレ「人間ってなんだ? 超 AI 入門」という番組で、2016 年に発表された AI によるレンブラントの「新作」が紹介されました。それは AI がレンブラントの全作品を分析した画像データを 3D プリントしたもので、AI は、手で直接描いてはいませんでした。いずれ絵を描くロボットや陶工ロボットが登場するとして、そのロボットは近所付き合いもするのでしょうか? AI が人に近づけば近づくほど「人間ってなんだ?」という壁にぶつかる。番組のタイトルにはそのような疑問が含まれていましたが、AI が限りなく人に近づいたとしても、人は手の仕事を続けてゆくような気がします。

## 柳宗悦と民芸

私の恩師四本貴資先生 (1926-2007) は染色家芹沢銈介 (1895-1984) の高弟の一人でした。芹沢は 1956 年に型絵染の人間国宝になりますが、その仕事はいわゆる染物に留まらず、なかでも本や雑誌の装幀は一家を成しています。それは柳宗悦 (1889-1961) が依頼した雑誌『工藝』(1931-1951、全 120 号) の表紙を芹沢が型染で制作したことがはじまりで、職人のように同じ仕事を繰り返すこの仕事から芹沢は工芸の基本を学び、後に世界的な作家として大成すること

につながります。

芹沢が生涯の師と仰ぎ、敬愛し続けた柳宗悦は、朝鮮の小さな焼き物から東洋の美を発見。同じ美しさを日本の様々な手仕事に見つけるための調査と収集をはじめます。1925 年、その手仕事に「民芸 (民衆の工芸)」という言葉を与えて民芸運動を開始。1934 年に日本民藝協会を創設、1936 年に東京・駒場に日本民藝館を開館。また、1940 年前後に全国の手仕事を調査して著作『手仕事の日本』にまとめます。本は戦後の出版でしたが、戦時下の日本各地に残された伝統的な手仕事が網羅されていると言っても過言ではありません。柳はその前書きで、「(前略) 欧米の事情に比べますと、日本は遥はるかにまだ手仕事に恵まれた国なのを気附きます。すべてを機械に任せてしまうと、第一に国民的な特色あるものが乏しくなってきます。機械は世界のものを共通にしてしまう傾きがあります。(後略)」と書いています。

1925 年に治安維持法が制定。1936 年に二・二六事件、翌年に盧溝橋事件が起こります。国中が一つの方向へ突き進む時代に、民芸と名付けた日本の文化を広く共有することが柳の民芸運動でした。自国の文化に目覚めることは、他の国や民族の文化にも目を向けることにつながります。自国第一という言葉が飛び交う今、柳の残した手仕事に学ぶことが少なくないと思います。

## 木綿の時代

出雲に藍板締と呼ぶ染物がありました。数十枚の板に模様を彫り込み、その型板と型板の間に布を挟んで締め付け、藍に浸けて模様を染め上げるもので、私はその復元に取り組みましたが、特に材料の入手が大変でした。型板のヒメ



目黒区駒場の日本民藝館



雑誌『工藝』(10、11、12号/東京造形大学蔵)



「竹に虎模様藍板締め裂」  
(江戸時代後期)

コマツ材は福島県の山中から丸太を手に入れ、国産綿花（和綿）を手紡ぎ手織りにした木綿の布は、福島・昭和村の一人の女性が織り上げてくれました。2006年に復元が完了、2008年、鳥根県立古代出雲歴史博物館で「よみがえる幻の染色－出雲藍板締めの世界とその系譜」展を開催しました。

江戸中期から木綿が普及すると木綿と相性の良い藍染も広がります。藍板締めはこの木綿の時代の藍染ですが、明治とともに廃れます。和綿の生産は明治の半ば頃にピークを迎えます。しかし、明治政府が機械生産に不向きな和綿に見切りをつけ、綿花や綿糸の輸入関税を撤廃したことで明治の末頃には限りなくゼロに近づきます。この時点で日本は農業立国を捨て工業立国に舵を切ったと論じる経済学者もいます。事実、昭和8年にはイギリスを抜いて綿布輸出量世界一の国になり、機械に押されて和綿の手袖、手織は消えました。日本民藝館に残されている美しい紺緋や絞り染は、機械以前の木綿の時代、藍染の時代の手仕事です。

### 民芸運動と手仕事フォーラム

柳の民芸運動は、過去の手仕事を集め愛でるのではなく、かつての手仕事を手本としてその美しさを学び、時代に合った手仕事を作り、使い、次の時代へ伝えてゆくことが目的です。日本民藝協会はその実践の場であり、日本民藝館は手本の収蔵庫です。

四本先生は晩年、日本民藝協会の専務理事を務めました。理事の一人に久野恵一（1947-2015）という私と同年の人がいて、彼は大学卒業と同時に手仕事を求めて全国を歩き、作り手と交流を重ね、優れた手仕事を鎌倉に構えた工芸店「もやい工芸」に運びました。また、1989年から協会の活

動として全国手仕事調査を開始。それは戦中に柳が行った手仕事調査の現代版で、その成果は「日本の手仕事展」などに結実しますが、『手仕事の日本』に取り上げられた多くがすでに消えている一方で、柳が知らなかった新たな手仕事の発見もありました。今なお日本の各地で作り続けられている現代の手仕事を多くの人に知らせたい。その思いを実現するために久野は協会の外へ活動を広げ、2002年に手仕事フォーラムを発足します。

手仕事フォーラムは、作り手との交流や産地での学習会などを開き、活動は会報誌やホームページなどで伝え、優れた手仕事を直営店で紹介しています。私はその創設に関わって今に至っていますが、若い会員が多く、AIと共に生きるであろう彼らの時代は、人の手が生み出す手仕事の役割はむしろ大きくなると確信しています。

### 第195回aacaフォーラム

日時：2019年3月7日

場所：サンゲツ品川ショールーム

大橋正芳（おおはし まさよし）

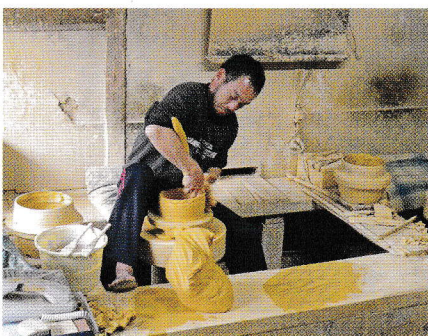
染色作家

1947年 新潟県新発田市生まれ

1972年 東京造形大学テキスタイルデザイン専攻卒業  
同大学で染色を指導

2013年 退職

2018年 東京造形大学 名誉教授



大分・小鹿田焼の陶工・坂本浩二さん（2012）



全国の手仕事が並ぶ鎌倉「もやい工芸」の店内



手仕事フォーラム全国大会  
（2018 倉敷市立美術館講堂）

広報委員会だより

会報 83 号 P28 事務局だより 法人会員の異動欄に編集間違いがありました。ご関係の皆様にお詫び申し上げます。

事務局だより

— 訃 報 — 心からお悔やみ申し上げます。



中島昌信氏

名誉会長 5月20日逝去 1928年生 享年91歳 元(株)メック・デザイン・インターナショナル社長

履 歴 1951年 早稲田大学第一理工学部卒業 三菱地所株式会社入社

1989年 同社 専務取締役就任

1993年 メック・デザイン・インターナショナル社長就任

協会歴 1989～2019年 日本建築美術工芸協会会員

1989～2003年 理事、2003～2004年 専務理事、

2005～2012年 会長、2013～2019年 名誉会長、

作 品 慶応大学三田校舎、富士銀行本店、東京會館、三菱ビルディング、池袋サンシャインシティ、

日比谷国際ビルディング、新宿 NSビル、横浜ランドマークタワー、他多数

受 賞 BCS賞

■新入会員・会員の異動 2019年2月～2019年6月(敬称略)

2016年9月 個人情報保護法の改正が成立した事を受け、個人は氏名のみ、法人は会社名・代表者又は担当者を掲載致します。

《新入会員》

個人会員	稲垣 誠 (ゼンスラー・アンド・アソシエイツ・インターナショナル・LMD)、 日東英成(株)ニットー)、高須好子(美術家)		
法人会員	リリカラ(株)	営業開発部部长 青山 央 担当 営業開発部 中澤 淳	〒160-8315 新宿区西新宿 7-5-20 TEL.03-3366-7865
	株ウオーター デザイン	代表取締役社長 山本 誠 担当 代表者と同じ	〒143-0004 大田区昭和島 2-4-2 TEL.03-3431-2598
	住友林業(株)	木構造推進室長 至田康二 担当 木構造推進室 福原 潔	〒100-8270 千代田区大手町 1-3-2 TEL.03-6841-4730
	東洋 アルミニウム(株)	執行役員 新事業創造部長 大久保嘉彦 担当 新事業創造部 高根喜一郎	〒140-0002 品川区東品川 2-2-20 TEL.03-5461-0706

編集後記

会報 83 号 (春号) は、4 月 22 日に発行され、平成最後の会報となりました。そして令和の時代は、10 連休からスタートしましたが、会員の皆様は、どのような休暇を過ごされ、また令和元年をどのような気持ちで迎えられましたでしょうか。

本年 6 月 6 日、令和と改元されて初めての通常総会が開催されました。岡本会長はご挨拶の中で、今年度はオリンピックイヤーに向けた aacaらしい事業活動を進め、あるいは地方をテーマに取り上げた事業にも取り組んでいきたいと抱負を語られましたが、会員の皆様からもオリンピックの思い出話、あるいは来年の東京開催に向けた準備に関わられたお話など、オリンピックにちなんだ寄稿などお待ちしております。また会報に対するご希望、ご意見もお待ちしております。(飯田郷介)

《会員の異動》

法人会員	(株)織絵	担当者変更	草薙拓巳 (前任 曾地啓介)
	(株)三菱地所設計	担当者変更	業務部専門部長 立原里樹 (前任 市村憲夫)
	(株)メック・デザイン・インターナショナル	担当者変更	業務統括部 大成奈津子 (前任 佐藤 剛)

aaca 2019.7 no.84

発行人 会長 岡本 賢  
発行 一般社団法人 日本建築美術工芸協会  
〒108-0014  
東京都港区芝 5-26-20 建築会館 6 階  
TEL 03-3457-7998 FAX 03-3457-1598  
URL http://www.aacajp.com  
E-Mail info@aacajp.com

編 集 広報委員会  
委員長 飯田郷介  
会報担当副委員長 野口真理  
会報編集委員 五十嵐通代 石田真人 置鮎早智枝  
竹生田 正 田島一宏 中村弘子  
松本治子 三上紀子 山崎和子  
山崎輝子 山下治子 吉田 誠

編集制作協力 株式会社 アム・プロモーション